



Title	『プロシャ士官』( 'The Prussian Officer' ) : 死の通過儀礼
Author(s)	内田, 憲男
Citation	大阪外大英米研究. 1985, 14, p. 215-234
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99090">https://hdl.handle.net/11094/99090</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「プロシャ士官」 (‘The Prussian Officer’)

### ——死の通過儀礼

内 田 憲 男

D.H.ロレンスの最初の短編集は1914年11月に出版されたが、「プロシャ士官」はその表題に選ばれた傑作である。<sup>1</sup> もっとも、この作品を同じ短編集に収められた「菊の香り」(‘Odour of Chrysanthemums’)や「牧師の娘たち」(‘Daughters of the Vicar’)に比肩すると見なすことには異論があるかも知れない。事実、後の二作品の評価については、多くの批評家の見解がほぼ一致しているのに対して、「プロシャ士官」の方は、作者の力業は認められながらも、留保条件が付け加えられる場合が多いのである。例えば、ロレンス批評の嚆矢『小説家 D.H. ロレンス』(D.H. Lawrence: Novelist)を著したF.R. リーヴィスは、長編のみならず中・短編においてもロレンスが偉大な作家であることを大いに賞揚したが、「牧師の娘たち」を「ある中心的で深い意味においてロレンスの天才を代表する」作品として特に一章を設けて詳細に論じる一方で、「プロシャ士官」については、初期作品に共通して見られる本質的な「未熟さ」を露呈していると断じ、簡単に片づけてしまっているのである。<sup>2</sup>

しかし、このリーヴィスの「プロシャ士官」評において見逃すことができないのは、彼がこの作品に「心理的な洞察」を認めながら、その表現が余りにも「感覚的、情緒的に」強烈であるために、読者は「息苦しくなる」あるいは「心がかき乱される」と述べ、この短編の持つ力強さは「不愉快な」性質のものだと極めて情緒的に反応している点である。<sup>3</sup> もちろん、小説が読者に直接訴えかけてくる要素を持つことを考えれば、読者が小説作品に快・不快を感じるのはむしろ当然のことと言ってよい。しかし感覚的な印象がそのまま作品を評価する際の基準と成り得るとすれば、これほどおかしいこともないだろう。

そのような批評の典型的な例として E. ヴィーヴァスの「プロシャ士官」に関する評言を挙げることができる。ヴィーヴァスは「この短編から受ける全体的な印象は当惑と不快であり、それは単に同性愛が作品の構成要素となっているという理由ばかりではない、……読者が作者によって言いようのない醜悪なサディズムに無理矢理加担させられるからである」と批判し、さらに「苛立ちと嫌悪感」しか読後の印象として残らないとしたら、作者の描く「不愉快な感情のもつれ」に巻き込まれることで何か得るところがあるのだろうか、と結論づけているのである。<sup>4</sup> 確かに、「プロシャ士官」は軍隊における同性愛的な関係、しかも大尉が従卒に加えるサディステックな暴力行為を中心に描写しており、読者が不快を感じても何ら不思議ではない。しかし作品の評価はあくまでもそういった感覚的な印象以外のところに求めるべきであろう。ロレンスは「プロシャ士官」を書いたのと同じ頃に、同性愛を描いたトーマス・マンの傑作『ベニスに死す』について、この小説は「肉体も魂も病んだ」一人の男の物語で、紛れもなく「不健全な」（‘unwholesome’）作品であるとしながら、「それにもかかわらず、病的（morbid）であるという印象は受けない——余りにも出来映えが見事だからであり、我々はそのような作品としてしかるべき評価を与えるのだ」と述べている。<sup>5</sup> 『ベニスに死す』のような作品に対してこの批評態度は極めて正当なものであるが、「プロシャ士官」を論ずる際にも、我々が範とすべきであろう。<sup>6</sup>

ロレンスが「プロシャ士官」の着想を得たのは、1912年5月にフリーダ・ウィークリーとドイツのバイエルン地方に駆落ち後、軍隊におけるスキャンダルめいた事件を見聞したからだと推定されるが、<sup>7</sup> 同年11月に彼が E. ガーネット宛に書き送った手紙の中に、当時彼が軍隊という男性ばかりの特殊な社会に発生する残虐行為についてどのような考え方をしていたかを示す、次のような重要な一節がある。

Cruelty is a form of perverted sex.... Priests in their celibacy get their sex lustful, then perverted, then insane, hence Inquisitions—all sexual

in origin. And soldiers, being herded together, men without women, never being *satisfied* by a woman, as a man never is from a street affair, get their surplus sex and their frustration and dissatisfaction into the blood, and *love* cruelty. It is sex lust fermented makes atrocity.<sup>8</sup>

残虐行為の原因をこのように性的な問題に還元してしまうことには異論があるかも知れないが、この見解が少なくとも真実の一端を突いていることも否定できないだろう。ともあれ、ロレンスの描く大尉の暴力行為が性的な意味合いを持つことは明白である。大尉は年の頃40才ぐらいの「傲慢で威圧的なプロシャ貴族」で、「西部部隊一番の乗馬の達人」であり、軍服がこの上なくよく似合う見事な肉体の持主である。しかし何よりも彼を特徴づけているのは、その「顔に刻まれた深いしわ」, 「苛立たしげに緊張した額」, それに「たえず冷たい炎のきらめいている薄青い眼」である。作者はこのような風貌を「生と闘う男の顔つき」と表現しているが、この言い回しは大尉の人となりについて極めて重要なことを物語る。彼は本来「情熱的な気質の男」でありながら、「軍務という観念」に己を固く縛りつけ、その強固な意志によって「たえず自分自身を抑圧している」のである。そして彼の場合、とりわけ抑圧しなければならないのは、同性愛に傾く自己の性向である。<sup>9</sup> 彼は未婚であるが、その理由は「結婚したい気持ちにさせる女がかつて一人もいなかった」からであり、また彼が士官クラブへ時折り女を伴うのも、むしろ体面のためだと考えた方が理になっている。なぜならそのようなことがあった後では、彼の額は「いつもにもまして緊張を帯び」、その眼も「ますます敵意のある、苛立った」ものになるからである。彼にとって従卒は最初でこそ単なる部下の一人にすぎないのだが、やがてこの若い兵士の「生気にあふれた」肉体は「温かい炎」のようなものに感じられ、彼は眼をそらそうとしてもそらすことができなくなる。ここで注意しなければならないのは、この若者によって大尉の中に引き起こされる感情が「苛立ち」であり、「憎悪もしくは怒り」であることだ。大尉は「従卒に対する中立的な感情」(‘his neutrality of feeling’ )を取り戻そうとするのだが、

「我知らず」従卒をたえず観察し、厳しい命令を下し、「可能なかぎり従卒の自由な時間を奪い去ろう」とする。つまり、従卒を無意識にわがものとしたい欲望に駆り立てられながら、その欲望を否定し抑圧しようとするのであり、そうした倒錯した心理が苛立ち、憎悪、怒りの感情を生み出すと解していいだろう。大尉が従卒の左手の親指の傷跡を見る度に「苦痛」を感じ、ついにその指に鉛筆の先を突き立てる行為も、また従卒に恋人がいることを知って嫉妬しながら、その感情は認めようとせず、苦痛のあまりベルトで従卒の顔をなぐり、従卒の苦痛の涙と口元を赤く染めた血を見て「ぞくぞくするような深い歓びと恥辱」を同時に感じるのも、さらにはまた女と「偽りの快樂」の数日間を過したあげく、以前と変らない元気を取り戻した従卒を見て「狂気の炎」をかき立てられ、従卒の恋人に対する気持を白状させようとして背後から何度も何度も蹴り上げて「快感のうずき」を覚えるのも、すべて大尉の歪んだ心理の成せる業である。これらの行為は正に、先の引用にある「残虐行為は倒錯した性<sup>セックス</sup>の一形式である」というロレンス自身の考え方を例証するものに他ならない。

しかし「プロシャ士官」が単に軍隊における同性愛的サディズム、あるいはそういった類のものを醸成する軍人精神を批判的に描写したものであれば、特に取り上げて論じる価値もない際物的な読み物にすぎないだろう。そのような読み方をするのは、大尉と従卒の同性愛的な関係をあえて否定しようとする態度<sup>10</sup>と同様、読者自身の偏ったものの見方をさらけ出すことにしかならないように思われる。なぜならこの短編の仕組みがそのような読み方を許さないからである。大尉のサディズムも単に同性愛的感情が抑圧されたために歪んだ形で発現したものと言っただけ言って済ますことはできない。なぜなら作者は大尉の暴力行為が、その犠牲となる従卒自身の極めて特異な性質によって誘発されたものであることをはっきり示しているからである。

従卒は22才ぐらいのたくましい身体つきの若者であるが、冷酷さの権化とも言ふべき風貌の大尉とは全く対照的に、「温かさや若々しさ」を全身から発散させている。

There was something altogether warm and young about him. He had firmly marked eyebrows over dark, expressionless eyes that seemed never to have thought, only to have received life direct through his senses, and acted straight from instinct.

ここで作者は従卒の特質を眼の表情を通して表現しているのだが、この若者が「かつて一度も考えるということがなく、ただ五官を通して直接に生を受け入れ、本能のままに行動してきた」のだとすれば、その生のあり方は、彼が動物ならともかく、人間としては余りにも特異であると言わねばならない。「暗い、まるで表情のない眼」が示唆しているように、従卒の生活には精神ないし意識というものが全く関わりを持たないように思われるからである。現に、作者はこの若者を「無意識の存在」と表現し、その動作を「一匹の自由に動きまわる若い動物の盲目的で、本能的な、過つことのない動き」に喩えている。彼の恋人との関係もまた恋愛というよりは動物同士の睦み合いとでも言った方が似つかわしい。女もまた「自然のままの」(‘primitive’)山の娘であり、「彼が彼女と付き合っているのは、話をするためではなく、彼女を抱くため、肉体の接触を求めるからであった」と書かれているのである。そしてこの野生動物にも等しい若者の生のあり方こそ、大尉を苛立たせる当のものなのだ。

[ The Captain ] could not get away from the sense of the youth's person, while he was in attendance. It was like a warm flame upon the older man's tense rigid body, that had become almost unliving, fixed. There was something so free and self-contained about him, and something in the young fellow's movement, that made the officer aware of him. And this irritated the Prussian. He did not choose to be touched into life by his servant.

従卒の生のあり方が、上の引用にあるように、「自由で自足した」ものであ

るのは、野生の動物がそうである如く、彼の生命が自然の生命と直結しているからである。一方、大尉の生のあり方は、その「硬くこわばった肉体」に示されているように、「ほとんど生命を失い、固定してしまった」ものとなっている。作者がここで両者の生のあり方を対蹠的なものとして呈示していることは言うまでもない。しかし問題は、大尉がなぜ「温かい炎」のようにも感じられる、自然の生命にあふれた若者の存在に「苛立つ」のかということである。引用の最後の方で大尉が「プロシャ人」と言い換えられ、さらに「彼は自分の召使などによって生命に接触させられるのはまっぴらだった」とあるのは示唆的である。大尉はその出自がプロシャの貴族であり、「長い美しい手をし、動作も洗練された紳士」で、歩兵連隊の指揮官でもある。その人物が一介の従卒に対して個人として拘わること自体がそもそもおかしいのである。大尉が従卒の影響力を撥ねつけようとするのは、権威あるプロシャ軍人としての己の矜持が許さないのだろう。しかし大尉の「苛立ち」の原因をそのような社会的な身分の上下によって説明し尽くすことなど到底できない。ここで唐突に思われるかも知れないが、この作品のはじめの方で大尉の肉体が次のように表現されていたことを思い起こす必要があるだろう——「従卒は大尉の身体を拭わねばならないような時、乗馬のために驚くべく発達した大尉の腰部(loins)の筋肉を見て感服するのだった。それ以外のことでは従卒は大尉のことをほとんど気にとめなかった……」。「loins」という言葉がロレンスにとって特別な意味を担うことは指摘するまでもないだろう。そこは原初的な生命中枢の宿る身体の部位なのである。従って、他ならぬ従卒の視点で書かれたこの文章は、従卒と同様、大尉の肉体の裡にも自然のままの生命が具わっていることを暗示している。しかしその同じ大尉の肉体が上の引用では、「ほとんど生命を失い、固定してしまった」と表現されているのである。この矛盾はどのように理解すればいいのだろうか。ここで再び、作者が大尉の風貌を「生と闘う男の顔つき」と表現していることに注目しなければならない。「生と闘う」とは、大尉の場合、プロシャの軍人精神に依拠して自己の生の形を創り上げ、またそれを維持して行くために、たえず己の裡なる自然の生命を抑圧し続けるという謂に他ならな

い。従って、大尉の硬直した肉体は、彼が「生と闘う」ことによって支払わねばならなかった代価がいかなる性質のものであったかをはっきり示しているのである。この大尉にとって従卒の存在が「苛立たしく」感じられるのは、むしろ当然だと言ってよい。なぜなら従卒の体現する本能的な生のあり方は、大尉がプロシャ士官としての自己のアイデンティティを守るために、自分自身の裡において抑圧しなければならない当のものであるからだ。彼にとって「温かい炎」のような従卒の存在は、氷を溶かす火にも似て、自己の生のあり方を根底から突き崩すものなのである。「プロシャ士官」の筋立て、すなわち従卒の〈動物性〉が繰り返して強調され、その都度大尉が怒りと憎悪をかき立てられて暴行に及ぶという構図は、大尉のサディズムが、先に述べた同性愛的嗜欲と相俟って、自らの生のあり方を維持しようとする自己防衛的な行為でもあることを物語っているのである。

しかし「プロシャ士官」における作者の関心が、大尉よりもその犠牲者となる従卒の運命の方に向けられていることは、様々なエピソードが主として従卒の視点から描かれていることから、またストーリーの後半がもっぱら従卒の生のあり方が変化して行く過程を追っていることから明白である。従卒は度重なる大尉の暴行を受けながらも、決して反抗的な態度を取ることがないのだが、それは彼の「本能」が大尉を「人間ではなく、ひとつの抽象的な権威」として見ることの必要性を彼に教えるからである。従卒の大尉に対するこのような接し方を、作者はまた「太陽や雨を受け入れるのと同じように」という比喻を用いて表現しているが、これは従卒が「自然のままの」ないし「無意識の」存在として大尉に仕えることができる限りにおいて、彼本来の野生動物にも等しい生のあり方が損なわれることがないことを意味する。しかし肉体に加えられる暴力は従卒の生のあり方を変化させずにはおかず、大尉の暴行を受ける度に、彼に生来具わっていた「自然の完全性」（‘natural completeness’）は徐々に喪われて行く。またそれと共に、従卒は「知らず識らずのうちに」己の本能に逆って、大尉に対する「憎悪」を募らせて行くことになる。この変化は「無意識の存在」であった従卒が、その無垢の肉体を傷つけられることによ



て、本来の存在原理を抛り所とすることができなくなり、否応なく「意識」を目覚めさせられて行く過程であると解釈することができる。そして大尉のサディズムのクライマックスとでも言うべき暴力行為によって、従卒の生のあり方は致命的な影響をこうむることになる。まず「昏睡状態で死の一夜」を過した従卒がその翌朝、自分と大尉との関係を次のように感じることに注目しなければならない。

He did not want anybody to know. No one should ever know. It was between him and the Captain. There were only the two people in the world now – himself and the Captain.

この引用の直前のパラグラフの中に「彼は考えなくても何が起こったのか分かっていた」と書かれていることから、前夜の大尉の暴行が従卒に恋人がいることに大尉が嫉妬したために起こったこと、すなわちそれが性的な意味合いを持つ行為であったことを、従卒自身が本能的に悟っていると考えて間違いないだろう。本能のままに無意識の生活を送り、「およそ悩みなど経験したことの無い」若者にとっては、暴行自体よりもそれによって受ける心理的打撃の方がはるかに重大であると言わねばならない。しかもその若者の「意識」を徐々に目覚めさせたのが、他ならぬ性的な暴行を加えた当の人物であってみれば、彼が「今この世には二人の人間しかいない —— 自分と大尉だ」と感じるのも、少しも不自然なことではない。従卒はこの時、大尉との、否、自分以外の人間との関係を初めて「意識」するに至ったと言い得るだろう。

さらに、この直後、従卒が朝のコーヒーを大尉の部屋へ持って行く場面において、従卒の本来の生のあり方に決定的な変化が生じることになる。

The officer, pale and heavy, sat at the table. The orderly, as he saluted, felt himself put out of existence. He stood still for a moment submitting to his own nullification – then he gathered himself, seemed to regain

himself, and then the Captain began to grow vague, unreal, and the younger soldier's heart beat up. He clung to this situation – that the Captain did not exist – so that he himself might live. But when he saw his officer's hand tremble as he took the coffee, he felt everything falling shattered. And he went away, feeling as if he himself were coming to pieces, disintegrated.

従卒が大尉を見た瞬間、「自分自身が消えてなくなる」ように感じ、またしばらくして「自分自身を取り戻す」と、今度は逆に大尉の存在が「ぼんやりとした、実体のない」ものに思えてくるというのは、両者の生のあり方が根本的に相容れないことを如実に示している。言い換えれば、従卒と大尉は共存し得ない存在であり、そのことを本能的に察知したために、従卒は「自分が生きられるように、大尉の存在しない状態」に必死になってすがろうとするのである。ところで、この状態が続くためには、すでに言及したように、大尉が「人間ではなく、ひとつの抽象的権威」としての位置にとどまっていなければならないし、またそのためには、従卒が「無意識の存在」であり続けることが前提となる。しかし従卒がもはや十全な形でそのような存在ではないことは、すでに見た通りである。作者はここで実に功妙に、コーヒーを取る大尉の「手が震える」のを従卒が目撃するところを描くことによって、従卒の迷妄を打ち砕こうとしている。大尉は「激情に溺れた記憶は思い出さないでいられる」人間であり、前夜の従卒との件も「否定することに成功した」のである。ところが、この意識と無意識、あるいは精神と肉体が非人間的なまでに分裂しているはずの大尉の手が震えたのである。従卒はこの瞬間、大尉が「抽象的な権威」などではあり得ず、一人の生きた人間であることを悟ると同時に、自分と大尉との関係が単に軍隊における上下関係にとどまらず、特異な個人的関係であることを徹底的に思い知らされるのである。「彼はすべてが粉々に砕け去るのを感じた。そしてまるで自分自身が粉々に崩壊してゆくような気持ちになって部屋を出て行った」という引用の最後の文が、従卒本来の生のあり方が互解したことを指して

いるのは言うまでもない。

従卒はこの後、「自分を救うのだという唯ひとつの眠りのように重苦しい意志に満たされて」、朝の行軍に参加するのだが、見慣れているはずの演習地が彼には「見知らぬ土地」に変じてしまう。山々と谷間の風景は「超自然的な」ものを感じられ、また河の上を飛び交う水鳥は「水と雪の薄片のように」彼の眼に映る。さらに、草を刈る農夫は「自分とは全く何の関係もない夢の中の人間のように」思われ、羊飼いの姿も「自分には見えていても、羊飼いの方では見えなだろう」と感じるのである。自然の事物に対するこの異和感は、従卒の生のあり方が根本的に変化したこと、すなわち自然と一体の存在であった従卒が、己の存在基盤が崩壊したことで、自然と調和のとれた関係を持てなくなってしまったことをはっきりと示している。事実、従卒は朝の陽光が燦々と降りそそぐ世界の中で自分だけが「生きる場所」を与えられていないとまで感じるのである。

Nothing... could give him back his living place in the hot, bright morning. He felt like a gap among it all .... He felt as in a blackish dream: as if all the other things were there and had form, but he himself was only a consciousness, a gap that could think and perceive.

「他のものはすべて存在し、形をもつのに、自分だけは単にひとつの意識、ものの事を考えそして知覚することのできる裂け目にすぎなかった」という表現ほど、従卒の変わり様を明快に語る言葉もないだろう。かつては「無意識の存在」であった彼がここでは正に「意識的な存在」に変貌しているのである。この従卒に馬上の大尉が「誇りと確信」に満ちあふれ、「朝の陽光がすべて集中した、生气あふれる輝かしいもの」、言わばこの世の「支配者」のように感じられ、他方、自分自身は「陽光の下にはいつくばる影」の如き「無」の存在に思えるとしても、何ら不思議ではない。

ところで、「プロシャ士官」が興行きの深い優れた作品に成り得ているのは、

作者がこの〈意識的な自己〉を自らの裡に抱え込んだ従卒の悲劇的運命を、一切の感傷をまじえずに最後まで描き切っているからである。意識と無意識ないし精神と肉体の葛藤は、ロレンスの小説の登場人物に顕著に見られる特徴であるが、従卒の場合は、彼が本来「無意識の存在」であった分だけ、極端な形で表面化する。「意識」に支配されるようになった従卒は、大尉の姿を見る度に己の「空しさ」を思い知らされるのだが、同時に彼がそのことを意識すればするほど、彼の内部で肉体が厳しい反動を起こすようになる。作者はこの一連の抑圧された肉体の反作用を、いずれも根源的な生命を表象するイメージ、「閃光」(‘flash’), 「火」(‘fire’), 「炎」(‘flame’)が従卒の肉体を「刺し貫く」あるいはその裡で「燃え上がる」といった言い回しを用いて、何度も繰り返し表現し、精神と肉体が分裂するようになった従卒の生のあり様を描き出す。

But it was only the outside of the orderly's body that was obeying so humbly and mechanically. Inside had gradually accumulated a core into which all the energy of that young life was compact and concentrated .... There was a pain in his head, as he walked, that made him twist his features unknowingly. But hard there in the centre of his chest was himself, himself, firm, and not to be plucked to pieces.

この引用は、精神と肉体の遊離状態に苦しむ従卒を描いているが、また「彼の内部に徐々に若い生命のエネルギーのすべてが凝縮されて集中するひとつの核が形成されていた」という文によって、一度は互解した従卒の本能的なく生〉が反動によって再びその力を回復していることを明らかにしている。そしてこの蓄積された本能的な生命エネルギーが爆発するという形をとって、従卒は大尉に襲いかかり、殺害してしまうのである。

And the instinct which had been jerking at the young man's wrists suddenly jerked free. He jumped, feeling as if it were rent in two by

a strong flame ....And it was pleasant, too, to have that chin , that hard jaw ... in his hands. He did not relax one hair's breadth, but, all the force of all his blood exulting in his thrust, he shoved back the head of the other man, till there was a little ' cluck ' and a crunching sensation.

従卒のこの行為は、上の引用が示すように、抑圧された「若い生命のエネルギー」の「解放」という点に際立った特徴があり、その面だけを見れば、従卒が自己本来の本能的な生のあり方を大尉の破壊的な影響力から守ろうとする行為として、積極的に意味づけることも可能である。しかし注意しなければならないのは、従卒の〈生〉が本来の「自然の完全性」を維持していれば、すなわち意識と無意識ないし精神と肉体の分裂が生じていなければ、「若い生命のエネルギー」が抑圧されることはあり得ず、従って上のような行為は起こり得ないという点である。ここで従卒が残虐な殺人行為を犯しながら、その行為に「快感」を感じていることに注目しなければならない。これは彼の行為が大尉のサディスティックな暴行に相通じる性質を持つということに他ならない。F. エイマンは従卒の大尉殺害について、ある意味では大尉に対する「勝利」であるが、別の意味では「降伏」であると述べたが、<sup>11</sup> 確かに、従卒の行為は一面的な見方では捉えられない矛盾を孕んでいる。そしてこの点は大尉の死体に対する従卒の複雑な反応の仕方にも反映している。彼は自らの手で大尉を殺害したことを宿命的な行為と考えることによって自らを納得させようとしながら、また同時に変わり果てた大尉の姿を黙然と見つめているうちに、次のような感慨を抱かざるを得ないのである。

It was a pity *it* was broken. It represented more than the thing which had kicked and bullied him.

大尉の死体が従卒にとって「彼を足蹴にし、虐待したもの以上の何か」を「表象」しているとすれば、それは大尉という一個の人間の生のあり方それ自体と

言う他ないだろう。そして遺骸を前にして従卒が「哀れみ」の感情を覚えるのは、彼がここではじめて大尉の人間としての存在を認めると共に、大尉が自分と相通ずる人間であることを感得したからだと思われる。

大尉殺害によって従卒が学ぶのはそれだけではない。彼は大尉の無惨な死体を見ていることに耐え切れず、それを整えて静かに木の下に横たえ、その傍らにしばらくの間とどまるのだが、そこで作者は「ここで従卒自身の生もまた終わったのである」という極めて暗示的なコメントを付け加えているのである。字義通りに解釈すれば、大尉の死はそのまま従卒の死に直結しているということになるが、これは何を意味するのだろうか。ここで従卒が恋人の件で大尉に手酷い暴行を受けた翌朝、「今この世には二人の人間しかない——自分と大尉だ」という覚醒にも似た思いを抱いたことを想起すべきだろう。すでに指摘したように、従卒はこの時はじめて人間関係を意識したのであるが、それ以後、彼の意識領域を占めたのは大尉ただ一人だったのであり、その上、自然の事物もまた彼にとって「実体のない、はかない影」の如きものになってしまったのである。つまり〈意識的存在〉となった従卒にとっては、自己の存在を証明するものが大尉との関係だけであつたと言えるだろう。従って、大尉殺害は従卒が自己のアイデンティティの唯一の拠り所であつた人間を自ら抹殺したという意味を持ち、その行為は従卒自身の〈生〉を終わらせる行為にも等しかったのである。

「プロシャ士官」の終結部は、大尉との絆を自ら断ち切ることによって現実世界に足がかりを失った従卒が、一種の精神錯乱に陥り、死への彷徨を続け、その宿命的な死を迎えるまでを描いている。従卒にとって世界は、彼が自然との一体感を喪失した時点から、すでに夢のような非現実性を帯びていたが、大尉殺害によって彼は決定的に「日常の生から未知の世界の中へ」足を踏み入れることになる。従卒は「太陽がギラギラ照りつける谷間」を後にして、森の奥深くへ入って行き、再び広い世界へと出てくるのだが、森の中で彼の眼前に姿を見せる小鳥とリスが等しく言いようのない「恐怖」を彼に与えるのは示唆的である。作者はいずれの場合も、その素早い動き（動き回る小鳥は野ネズミに

喩えられる)を強調するのだが、従卒が「恐怖」ないし「パニック」に襲われるのは、これら小動物の動作が野生の生命に満ちあふれているからなのである。また、果てしなく広がる「みずみずしい」(‘young’)麦畑が「金色に燃え上がっている」のを目の当たりにした時にも、従卒は同じように「恐怖」を覚えて立ちすくむのである。そしてその金色の光に包まれた麦畑を先へ先へと進んで行く一人の女を眺めながら、従卒は次のような思いに打たれるのである。

He had no language with which to speak to her. She was the bright, solid unreality. She would make a noise of words that would confuse him, and her eyes would look at him without seeing him. She was crossing there to the other side. He stood against a tree.

従卒が踏み入った「未知の世界」がいかなる世界であるかはすでに明らかだろう。そこはすべて生命ある者とのコミュニケーションが一切遮断されている死の世界である。小鳥やリスが敏捷に動き回るのを見て従卒が「恐怖」に襲われるのは、かつては彼らと同じ自然の〈生〉を己の存在原理としていた彼がもはやアウトサイダーとして彼らを眺める他どうすることもできないことを感知するからである。彼はリスに話しかけたくなくて声をかけるのだが、彼の咽喉から出てくるのは「かすれた音」でしかない。また、自然の生命の豊穡を象徴するような広大な黄金色の麦畑を横切って行く女に対して、上の引用にあるように、従卒が意思を通じ合わせる言葉を持たず、ただぼつねんと女が遠去かって行くのを見つめているという情景ぐらい、従卒がすでに死の世界の住人であることを如実に示すものはあるまい。

しかし作者ロレンスが「プロシャ士官」において描こうとしたのは、一人の無垢な若者の〈失樂園〉の物語ではないだろう。ここで作者が、「従卒は日常の生から未知の世界の中へ入り込んでいた」と書いた後、続けて「後はもう引き返すことはできなかつたし、そうしたいとも思わなかつた」(傍点引用者)と付け加えていることに注目しなければならない。この言葉には、従卒に言わ

ば積極的に「未知の世界」の中へ入り込ませようとする作者の意図が感じられるからである。ともあれ、従卒の死の彷徨が数ページにわたって描写されることによって、以下のような人間の存在のあり様についての認識が、従卒の経験として読者に呈示されるのである。

Now he had got beyond himself. He had never been here before. Was it life, or not life? He was by himself. They were in a big, bright place, those others, and he was outside. The town, all the country, a big bright place of light: and he was outside, here, in the darkened open beyond, where each thing existed alone. But they would all have to come out there sometime, those others. Little, and left behind him, they all were. There had been father and mother and sweetheart. What did they all matter. This was the open land.

この引用は「日常の生活」を営む人間の世界を「光」の世界として、また従卒の参入した「未知の世界」をその外に広がる「闇」の世界として描いているが、重要なのはその「光」と「闇」の両世界が断絶、否、対峙することさえなく、連続したものとして捉えられている点である。「自分自身を越えてしまった」従卒と同様、あらゆる人間もまたいつかは明かるい日常の世界から「闇」の世界へやって来なければならないのである。従卒が一瞬「これは生だろうか、それとも生ではないのだろうか」と思い惑うという事実が、何よりもこの生死の両世界が連続していることの証となっている。そしてありとあらゆる人間を迎え入れる死の世界に比べれば、生の世界は「ちっぽけな」ものでしかない。「父が母が恋人がいた。しかし彼らが一体何だというのだ。」という従卒の思いも、彼が死の世界——すべての人間が絶対孤独の状態でしか存在し得ない広大な「闇」の世界に入り込んで得た認識であることを考慮すれば、何ら不自然なものではないだろう。

このような言わば死の通過儀礼を経て、従卒は森の中から再び黄金色に輝く



麦畑によって表象される生の世界へ出てくるのだが、その時彼は「実在（reality）の直中に、実在の暗い底」にたどり着いたという意識に満たされる。その夜、従卒が目の当たりにする、絶え間なくひらめく稲妻によって暗闇の中に浮かび上がる世界の光景は、それが現実の風景でありながら、同時に「実在の暗い底」から彼が見た生の世界の本质についての幻視的ヴィジョンとでも言うべきものである。

The world was a ghostly shadow, thrown for a moment upon the pure darkness, which returned ever whole and complete.

最後に、従卒が己の死を真近にして「一体化」としたいと願う、雪溪に飾られた青白い山々の持つ象徴的な意義について触れておかねばならない。「プロシヤ士官」はフラッシュバックの手法が用いられており、冒頭の場面は、従卒が大尉から受けた「両腿の裏側の深い傷」の痛みをこらえながら朝の行軍を続けるところを描いているのだが、そこにすでに、現実の自然と人間の生の世界を表象する陽光のあふれる谷間の風景と対照的に、「青く、冷たい」山々がその荘嚴な姿を見せている。

He walked on and on in silence, staring at the mountains ahead, that rose sheer out of the land and stood fold behind fold, half earth, half heaven, the barrier with slits of snow, in the pale, bluish peaks.

「天」と「地」の間に屹立する山々の頂上が、すでにこの段階で「天界」（‘the heaven’）のヴィジョンとして呈示されていることに注目すべきだろう。その山々を凝視しながら黙々とひたすら歩き続ける従卒が、死の通過儀礼を経験した後、山々が「奇跡の光」に包まれるのを眼にし、また瀕死の状態に陥りながら「とりつかれたように」起き上がり、その時再び真正面に姿を現わした山々に自己の魂が「一体化」することを渴望するのは自然の成行きである。そしてそ

の願いは彼の死と引きかえに実現されるのである。

There they ranked, all still and wonderful between earth and heaven.  
He stared till his eyes went black, and the mountains, as they stood in  
their beauty, so clean and cool, seemed to have it, that which was lost in  
him.

ロレンスは「プロシャ士官」を書いた後、二年余りして「山越えのキリスト  
磔刑像」(‘The Crucifix Across the Mountains’)という印象的な旅のエッセ  
イを書き、その中で、「すべてが血、五感から成る」バイエルン地方の農夫の  
運命が、常に彼らの頭上にある雪溪を頂く山々によって支配されている所以を  
次のように表現したが、従卒の運命は正にこれら農夫の一生に重ね合わせるこ  
とができるのである。

For overhead there is always the strange radiance of the mountains,...  
the ice and the upper radiance of snow are brilliant with timeless im-  
munity from the flux and the warmth of life .... always, overhead, there  
is the eternal, negative radiance of the snows. Beneath is life, the hot jet  
of blood playing elaborately. But above is the radiance of changeless not-  
being. And life passes away into this changeless radiance .... the radiant  
cold which waits to receive back again all that which has passed for the  
moment into being.<sup>12</sup>

注

- 1) この作品は 1913 年 6 月に ‘Honour and Arms’ という題で書かれ、翌年の 8 月に English Review 誌上に掲載されたが、原稿の一部がロレンスに無断で削除されていたため彼を激怒させた。(因縁話めくが、削除した張本人はこともあろうに Norman Douglas であった。)また短編集に収められる際、削除部分は元に復したのだが、Edward Garnett が独断で題名を ‘The Prussiar Officer’ に変更し、さらにロレンスの反対の意向を押し切ってしまったため、それまでの両者の協力関係が破綻する一因となった。  
Keith Cushman, *D. H. Lawrence at Work : The Emergence of the Prussiar Officer* ( The Harvester Press, 1978 ), pp. 210 -14 および  
D. H. Lawrence, *The Prussiar Officer and Other Stories*, ed. by John Worthen ( Cambridge University Press, 1983 ), pp. xxxi -xxxiii 参照。
- 2) F. R. Leavis, *D. H. Lawrence : Novelist* ( Penguin Books, 1964 ),  
p. 74 ; p. 257. なお、この点について R. P. Bilan はリー・ヴィスの根本的な批評態度との関連で示唆に富む指摘をしている。*The Literary Criticism of F. R. Leavis* ( Cambridge University Press, 1979 ), pp. 239 -40.
- 3) Leavis, p. 257.
- 4) Eliseo Vivas, *D. H. Lawrence : The Failure and the Triumph of Art*  
( Indiana University Press. 1960 ), pp. 195 - 97.
- 5) *Phoenix : The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*, ed. by Edward D. McDonald ( William Heinemann Ltd, 1936 ), p. 312.
- 6) George H. Ford, *Double Measure : A Study of the Novels and Stories of D. H. Lawrence* ( W.W. Norton & Company, Inc., 1965 ), p. 76.  
参照。なお、拙稿を書くに際して、この書物から最も多くの示唆を受けたことを断わっておきたい。
- 7) Emile Delavenay, *D. H. Lawrence : The Man and his Work : The Formative Years : 1885 -1919* ( Heinemann, 1972 ), p. 196. および

Cushman, p. 209 参照。

- 8) テキストは前掲書 Cambridge 版を利用したが、「プロシヤ士官」が短編であることを考慮し、煩雑さを避けるため、ページ数は記さないことにした。
- 9) 「密かな同性愛はロレンスの小説の大きな一要素である」とする Kingsley Widmer の見解に筆者も同意する。*The Art of Perversity : D. H. Lawrence's Shorter Fictions* ( University of Washington Press, 1962 ), p.7.
- 10) Mark Spilka, *The Love Ethic of D. H. Lawrence* ( Denis Dobson, 1958), p. 172.
- 11) Frank Amon, 'D. H. Lawrence and the Short Story' in *The Achievement of D. H. Lawrence*, ed. by Frederick J. Hoffman and Harry T. Moore ( University of Oklahoma Press, 1953 ), p. 229.
- 12) D. H. Lawrence, *Twilight in Italy* ( Penguin Books, 1960 ), pp. 11 - 12.

